2013年社会思想史学会セッション

　啓蒙・郷土愛・国民国家

――コスモポリタニズム・共和主義・ナショナリズム――

　ヨーロッパ中心主義が断罪されてから久しいが、ヨーロッパ近代思想の遺産を研究することは、いまなお我々が直面している様々な問題を考える上で、参考になる。

世界の最先端を行っていると概括できるEUでは、国民国家の役割が縮小され、統合が進んでいるが、一方では、ナショナルな問題やエスニックな問題が噴出し、様々な利害対立の発生が繰り返され、統合の努力は終わりをしらない。

東アジアは中国の急成長によってバランスが大変動し、国際関係の危機を迎えている。TPP交渉も予断を許さない。近代の幕開けとともに古い自由主義と保護主義のバランス問題が今なお関係国の重要な交渉マターであり続けている。

こうした21世紀の国際関係に目を向けると、18世紀のヨーロッパの国際関係からどれほど進んだのかとの思いさえ萌す。一枚岩のかつての中世的なキリスト教共同体は解体したが、学問共同体として18世紀のヨーロッパは自由な交流を維持していた。啓蒙の起源は寛容の国、オランドにあったように思われる。アングロ・マニアやフランコ・マニアが活躍した。しかし、国民国家が生まれ、国家理性の命令に応じるかのように、リアリズムは利益追求（国益？）を目指した。普遍的な自然法思想を放棄し、国家理性に巻き込まれる知識人も登場する。拡大する共和国=帝国に警戒した共和主義者は自治・独立を擁護するであろう。

こうして啓蒙のコスモポリタニズム（自由主義）、リパブリカニズム（共和主義、パトリオティズムないしシヴィック・ヒューマニズムCH）、ナショナリズム（重商主義と主権国家論）が緊張感を生み出し、対抗イデオロギーとなっていく。こうした三つ巴の思想の対抗を超えるべくポリティカル・エコノミーPEが形成される。それは政治秩序学としての経済学であった。政治の秩序を支えるものとして、政治を超える学問としてPEは登場する。それは国家の機能をインフラ部門に限定することによって、また戦争の不生産性を明らかにすることによって、過剰な国家理性を削減しようとした。

このセッションでは、啓蒙・郷土愛・国民国家、あるいは寛容とコスモポリタニズム・共和主義・ナショナリズムの実態と可能性について思想史的な考察を行い、現代の諸問題への参照軸とすることを試みた。（組織者　田中秀夫　司会兼）

報告１　イングランド啓蒙とオランダ　　 伊藤誠一郎（大月短期大学）

いつの時代においても諸国家は常に経済競争にさらされてきた。注意すべきは、その時代の人々の視線から見たとき、国家間の経済競争が、その国とその国が目標とすべきモデル国との関係のなかで論じられることが多かったということである。いわゆる後進国が先進国を、一方で憧れの対象とし、真似るべきモデルとしながらも、他方で嫉妬と警戒の対象としていた。しかし、ヘゲモニーを握った国の歴史をふりかえるとき、どうしてもその国がそれ以前のヘゲモニーを常に意識しながら成り上がっていったことを忘れがちである。本報告で見ていくのは、17世紀のイングランドであり、彼らがどのように、彼らの真似るべきモデルであった憧れの国オランダを論じてきたかということである。ここで焦点をあてるのは、経済、当時の言葉でいえばトレイドをめぐる諸議論のなかでどのようにオランダとイングランドの関係が論じられたか、とくに17世紀のイングランドが、当時ヨーロッパ経済の頂点に君臨していたオランダから何を学ぼうとし、オランダ社会・経済をどのように分析したのかということにある。

　1601年にワイン商人のジョン・キーマーは、ニシン漁や造船をオランダから学ぶべきだと論じた草稿をエリザベス女王に献呈していた。1620年にも同趣旨の草稿を書き、いずれの草稿も複数書写され回覧されていた。これらは17世紀を通じてキーマー自身の名前で、もしくは他の著者の名で多く活字化され刊行された。キーマーの主張の力点は、イングランドには豊富な漁業資源があるにもかかわらず、人々は怠惰であり、それに対しオランダにはほとんど国内生産物がないにもかかわらず人々は勤勉で、イングランドの漁場から大量のニシンなどの魚をとって、それを他国に売って富を増やしているという点にあった。また、1620年の論考では、オランダの強さが、買占めを可能にする貯蔵庫と、低関税にあることも強調された。ベンジャミン・ウォースリーによる1651年のパンフレットでは、スペインの「普遍君主国」からオランダの「普遍貿易」へのヨーロッパのパワー・バランスのシフトが指摘される。それは、国土の広さではなく、その船の数の多さと強さゆえに可能であるとされた。ここでも、オランダの優位点はニシン漁と造船にあるとされる。しかし、ここでは、その他の優位点も列挙される。例えば大量の資金による外国為替市場の支配、彼らの製造品への信頼、貿易の管理・保護のための他国との条約、低関税、発明・発見の奨励である。1665年に刊行された匿名のパンフレット『ネーデルランド連邦の情勢の正確な調査書』でも、オランダ人がブリテン沿岸の豊富な、タラ、ニシン、イワシなどの大部分をもちさっていくことを指摘し、また他方で船舶、船員、トレイド、都市と要塞、外国での軍事力、公収入、私的富、食料においてオランダが優位であることも指摘する。オランダの優位点の列挙はその後のいわゆる利子論争の中で、ジョサイア・チャイルドによってウォースリーに近いかたちで繰り返される。1670年の『交易論』でロジャー・コークは、より分析的なやり方で、しかしこれまでに指摘されてきたのと同じ内容のオランダの優位点を指摘する。

報告2　啓蒙の寛容とコスモポリタニズムの成立　　　大津真作（甲南大学）

セッションでの報告の趣旨は以下の四点である。

１）世俗化と脱魔術化を思想的方法論とする啓蒙は中世末期にも存在したことを説明した。啓蒙主義は１８世紀の啓蒙の世紀にフランスで始まったわけではない。そこで行われたキリスト教からの現実世界の解放と切断は、すでにウィリアム・オブ・オッカムとマルシリウス・デ・パドヴァに明らかである。また、ルターによる宗教改革も、すでにこの二人の神学者の徹底した世俗的法王権力批判と実際上のローマ法王領へのルートヴィヒ四世の侵攻によって、実践に移されていた。ちなみに、マルシリウスは、神聖ローマ皇帝とともに、ローマに入り、みずからの民主主義理論・マルチチュード論の実現に努力している。

だからといって、われわれは１４世紀から啓蒙主義が始まった、だとか、宗教改革が始まったと考えてはいけない。そうではなくて、人間につきつけられている課題は、永遠の昔から同じであるということである。

２）したがって、民主主義の思想も、オッカムとマルシリウスにすでに認められる。とくに、マルシリウスの民主主義論に特徴的なのはマルチチュードの権力ということである。これはすでに近代の民主主義思想と変わりはない。また、オッカムは、神の絶対的な恣意性を唱え、信仰の問題を完全に個人の内面に移すとともに、世俗の社会機構については、世俗の合理的な権力、したがって多数派の権力に委ねるという姿勢を貫いた。この点、デカルトの二元論的思考は、宗教と理性の共存を図る調停的な政治思想から発するものであることを説明した。彼の不徹底さは、フランス絶対主義社会の反映と考えられる。

３）いまホットに登場しているグローバリズムも、マルチチュードの問題性も、すべての社会思想の諸概念が歴史を貫いて存在しているのである。しかし、宗教からの自立を政治思想の分野ばかりでなく、寛容という形態で、経済社会全体に適用したのは、寛容思想の巨人、ピエール・ベールをもって嚆矢とすることを紹介した。しかしながら、ベールは宗教的寛容の先駆として高く評価されるものの、倫理を徹底的に相対化し、内面化し、利己的個人の自由に委ねてしまったことで、啓蒙の負の側面を後代に向かって開いたとも言える。

ベールの宗教的寛容によって開かれたこの重要テーマは、経済および経済学の領域に広げられ、これらの領域を宗教的倫理から独立させることに貢献した。これこそが経済学の誕生であり、市民社会における個人主義的倫理の定着である。ここでは、ベール、マンデヴィル（おそらくはベールのイギリスにおける弟子）、アダム・スミス（マンデヴィルの蜂の寓話から神の見えざる手の着想を得た）の経済自由主義的系譜をたどってみた。

４）最後に、フランス啓蒙の無神論者ドルバックのイギリス批判を紹介することで、スミスと同時代のイギリスが、経済を倫理から解放することによって、貴族の商人化、議会政治や文化、そして統治の腐敗の渦中にあったことを紹介した。無神論者から見てさえ、倫理の社会的喪失は、犯罪の多発など社会全体に不幸をもたらしていたのである。この点は、おそらく日本の西欧思想史研究のなかで、これまで盲点になってきたことだと言える。つまり、経済および経済行為を宗教的倫理から解放すると、社会全体から慈善や貧民救済という統治者の義務が消えてなくなり、社会を構成する人間の四分の三が不幸に陥るという、知られざる一八世紀反啓蒙の思想家シモン＝ニコラ＝アンリ・ランゲが鋭く摘出したアポリアに社会は直面するということである。

なぜこれがアポリアかというと、マルチチュードの没落は、同時にスパルタクス的叛乱を招き、社会全体の崩壊につながるからである。ランゲは、その点をはっきりと主張している。つまり、個人の自由を保証する社会は、すでにそれ自体が社会の崩壊であるというのである。したがって、彼の主張では、既成社会の崩壊とワンセットでなければ、真の人間の自由は実現し得ないということになる。

まとめとして述べたことは、一八世紀啓蒙によって成立した寛容とそのコスモポリタニズムは、信仰を一個人の心の内面の問題に限定することによって、カトリック信仰では外的強制の対象であった社会からの貧困の追放という、すぐれてマルチチュード的問題を等閑視する近代社会を出現させたということである。

報告3　郷土愛・共和主義・ナショナリズム　　　　　　　　田中秀夫（愛知学院大学）

　文明化を普遍的な価値として支持するコスモポリタンな思想傾向をもっていた啓蒙にとって、郷土愛とか共和主義、ナショナリズムが何であったかという問いは重要な問いであるが、これに応えるのはなかなか難しい。

　中世ヨーロッパはコルプス・クリスティアーナと封建領域国家の並立という二重性のもとにあった。郷土愛はどうであったか。知識人は移動したが、多くの民衆・農民は移動しなかったから地域の村に暮らし、商人や手工業者は中世都市に暮らした。地域への愛着は当然あったであろう。ルネサンスと宗教改革の時代をへて、科学革命とシヴィル・ウォーの時代になると人々の移動は頻繁となり、絶対主義国家と民衆の権利要求がぶつかる。自然法や共和主義は主権国家との関係で主権を抑制する思想として発展する。

　近代国家がリヴァイアサンとなって主権を掲げたとき、国内の平定は可能となっても、それは抵抗なき和合にはならず、内乱は抑止されているだけであり、しかも国際関係は自然状態→戦争状態のままに置かれた。勢力均衡による戦争の限定が近代ヨーロッパの国際政治の原則になる。しかし戦争は繰り返された。生存闘争、勢力争い、権力闘争、階級闘争が紛争を招いた。ヨーロッパは世界に目を向け、植民地支配を行なった。

名誉革命を受け入れたスコットランドは、国民の大反対を無視して1707年の合邦（Union）を受け入れる。ジャコバイトがそれに反対したことは言うまでない。反体制派であったジャコバイトは多様な人々であった。ステュアート家は元はカトリックであったが、カトリックだけでなくスコットランド人の多数の支持を得ていた。イングランドのトーリーにもジャコバイトはいたし、ジャコバイトのなかには改良地主もいたから、体制派になるか反体制派になるかの切れ目はさほど明確だったわけではない。しかも、ジャコバイトは親フランスで、インターナショナルでもあったから、彼らを単純に愛国者とかナショナリストとか称するのは無理である。スミスも盲目のジャコバイト詩人の作品集に序文を寄せたことが知られているし、合邦の完成に尽力したケイムズの祖先はジャコバイト派であった。

啓蒙の社交性の哲学はコンドルセの無限進歩の思想を生み出したが、コンドルセの夢はマルサスの人口論によって破られ、陰惨な時代精神にとって代わられた。生存競争、反啓蒙、ナショナリズム、適者生存のダーウィニズム、階級闘争のマルクスへ。19世紀は闘争モデルが席捲する時代となった。啓蒙の社交性の思想は退けられたが、消滅したわけではない。周期的恐慌、大量失業、低賃金、長時間労働、搾取、自然破壊、労働運動、階級闘争、帝国主義戦争、暴力革命。

啓蒙は社交性の思想を広めた。Sociabilityこそ対立を越えて、相互に友好な社会をつくることに役立つであろう。啓蒙思想家は国境を越えて交流した。学問や知識も国境を越える。啓蒙の社交性はナショナリズムの時代を生き延びて、グローバルな時代の相互交流の思想になった。人間は何に満足を感じるか。優れた財貨、豊かな感情、独自の文化、ありとあらゆるよきものが世界にあふれている。破壊的衝動に駆られるのではなく、相互に共存しつつ、Salus populiを目指すにはどうすればよいのか。それは啓蒙思想家の課題であった。